〈自負と偏見〉と〈第一印象〉

——イギリス小説研究試論——

海老池俊治

(1)〈自負と偏見〉と〈第一印象〉

ジェイン・オースティン（Jane Austen, 1775—1817）はイギリス小説史上最大の〈芸術家〉だと多くの学者や批評家がいう。しかも、たいてい、ためらいがちに「取材範囲は狭いが」と控え目な但し書きをつける。

もし〈芸術〉(art) という語が単なる表現の技法を意味するなら、取材範囲の狭いことは大きな欠陥であろう。オースティンのように一世紀半も昔の作家の場合には、なおさらの話である。ある物語がたとえどれほど巧みに出来上っていても、そこに提出された人間生活の映像が、結果として、読者の生活と無縁だとしたら、深い共感や感動を呼ばないであろう。が、オースティンはそうではない。文学史に名を残しながら実際はほとんど読まれないような作家ではない。彼女の小説はいまなお繰り返し繰り返し飜刻される。次々に飜訳が出る。世界中で愛読されている。いいかえれば、その〈芸術〉は永続性と普遍性を持っている。

小説家ジェイン・オースティンは基本的に確実に人間を把握しているように見える。といっても、〈人間〉は本来抽象的な孤立した存在ではないから、その小説家的把握は、事実上、個に関心が集中するにしても、当然、その他との関係の場を理解しなければ、成立しない。小説家は〈人間〉の歴史的・風土的な実体を認識しなければならない。

十八、九世紀の替わり目に、生涯独身で南イングランドの片田舎に暮らしたジェイン・オースティンは、もっぱら、彼女の知悉していた狭い範囲の生活現象を描くこ

とによって、〈人間〉関係の基本的な型を打ち出した——限定的であるために普遍的になりえるという〈芸術〉の光栄あるアイロニーを実証したのだといえよう。とすれば、彼女の研究はそのアイロニーの解明に焦点が絞られるはずである。

小説家ジェイン・オースティンへのアプローチは、それが〈文学研究〉の名にふさわしいためには、彼女の表現の実証的な検討に基礎づけられるべきであろう。そして、その検討、すなわち、彼女の用語の吟味は、右のような考慮に則って、それが個性的な言語であると同時に、十八・九世紀の歴史的な〈人間〉関係の表現であるという認識によって、方向づけられなければなるまい。

ジェイン・オースティンの作品中で最も完全な〈芸術〉品は恐らく『エマ』(*Emma*, 1815) である。したがって、オースティン研究の中心課題は、当然、『エマ』論の展開でなければならない。が、この物語は余りにみごとに完成されている。鑑賞の対象としてはとにかく、論議、ないし、分析の手がかりに便宜な手法上の断層を見出しにくい。その点で、『エマ』と並んで彼女の代表作とされる『自負と偏見』(*Pride and Prejudice*, 1813) は、作者が若年時代に執筆を始めただけあって、十八世紀在来の物語様式を模した細工のあとが残り、オースティンふうの表現が全体として成立していながら、いわばその組立ての隙間が目立つ。しかも、見かたによれば、明らかに『エマ』以上に溌剌とした生命感に満ちている。『自負と偏見』の表現を実情に即して調べてみることは、オースティン文学の〈芸術〉性を究明する恰好な手段だと思われる。

以下の論考は、『自負と偏見』の用語とその観念の歴史的な——実質的に、小説史的な考証を通して、オースティン文学の〈芸術〉性を、ひいては、イギリス小説の実体を、捕えようとする一試論である。

ジェイン・オースティンの愛読者のあいだで常識になっているように、『自負と偏見』はもともと『第一印象』(*First Impressions*) という題名で一七九六—七年、すなわち、作者が二十一—二歳のときに、書かれたのであるが、[1] その題名の変更が当時かなり有名であった小説『セシリヤ』(*Cecilia*, 1782) 中の句に由来するらしいことを、オースティン全集の編集者チャップマンが指摘してい

る。チャップマンはそのころ“pride and prejudice”という句を書きとめた二人の婦人があったことを記している。[2] が、なお、頭韻を重ねたこの顕著な形の対句は、十八世紀末に一種の流行語となったらしく、少なくとも二、三の物語——今日ほとんど忘れられてしまったが、当時広く愛読された小説のなかに、散見する。そして、それらの語と観念を借用したオースティンが、それをいかに自作のモティーフに使ったかは、かつて小著に論述した通りである。[3]

が、そればかりでない。成句〈自負と偏見〉でなく、“pride”と“prejudice”というそれぞれの語が対立的に併用された語例は、他にも数多く見出される。たとえば、メアリー・ロビンソンの『ウォルシンガム』(*Walsingham* 1797) という感傷的な流行小説の冒頭に、それら二つの語、したがって、その観念が、著しい形で出てくる。もっとも、ジェイン・オースティンはこの小説を読んだ証拠がなく、それは一応勘定に入らないかもしれない。が、彼女が自作中に明らかに言及、ないし、揶揄した物語、たとえば、アン・ラッドクリフの二作『森のロマンス』(*The Romance of the Forest*, 1791) 及び『ユドルフォの怪奇』(*The Mysteries of Udolpho*, 1794) にも、また、マライヤ・エッジワースの『ベリンダ』(*Belinda*, 1801) にも、それらの語は対立的に記され、その観念が目立つ。[4]

優れた論証家Q・D・リーヴィスが考証したように、[5]〈自負と偏見〉という句が『セシリヤ』から取られたばかりでなく、「『第一印象』の着想はそもそもセシリヤの物語を写実的に書き直すこと」であったとは、きわめてもっともな想定に相違ない。が、その半面、〈自負と偏見〉という観念はいわば当時の小説文学に通有であり、ジェイン・オースティンは時代の児らしく、さりげなくその通有観念を取り上げたのだともいえよう。

とすれば、改題以前の題名〈第一印象〉の選定が単に作者の思いつきであったのか、あるいは、〈自負と偏見〉の場合のように時代的通有観念にたいする反応であったのかは、かなり興味深い問題であろう。

もちろん、成句“first impressions”はきわめて普通の英語である。『オクスフォード英語辞典』の項目“Impression”の6bに、二つこの句の用例があがっているが、

とくに、取り立てていうほどのこともないようである。[6] ただ、十八世紀的な語感からすれば、この句は、好意にせよ、嫌悪にせよ、若い男女間の個人的感情を意味したことが多いらしく、右に名をあげた『ユドルフォの怪奇』の第一章に、そのような意味での用例が見える。[7] この物語を『ノーサンガー・アベイ』執筆の動機に持ったオースティンが、『自負と偏見』を、いや、むしろ、『第一印象』を書くに当たって、その個所を念頭においていたかもしれない、と想像することは、見当はずれではないであろう。

しかし、そういう意味での成句〈第一印象〉はラッドクリフ特有の用語などではない。じつは、小説文学の創始者といわれるリチャードソンが、すでに、その全作品三篇のいずれのなかにも筆にしている。ジェイン・オースティンの兄が書いた彼女の追憶記にも、甥が書いた伝記にも、彼女がリチャードソンを愛読したことが記してある。[8] ジェイン・オースティンはリチャードソンの用語から、少なくとも、リチャードソン流の語法から、〈第一印象〉という題名を思いついたに相違ない。とにかく、リチャードソンが、実際、どのような情況でどのような含意でこの句を使っているかを、ジェイン・オースティンの創作との関連において検討することは、徒らな物好きではないと思われる。

まず、『パミラ』のなかでは、その第二部（*Pamela in her Exalted Condition*, 1741. 第一部、すなわち、*Pomela. or. Virtue Rewarded* は一七四〇年刊）の終り近くに数度出る。周知のように、この物語の第一部で、小間使の少女パミラが淑徳の酬いを受けて、主人B氏の正妻になるのであるが、いまや上流社会でも評判の高い立派な主婦として、彼女が若い女性に身持ちについての教訓を垂れる個所である。だいたい、人生経験の乏しい少女が簡単に男にのぼせ上る気持〈一目惚れ〉を、パミラが警告するのである。実際、"first impressions"という句が出る一ページほど前に、"first-sight love"という語が見える。パミラによれば、劇、小説、ロマンスなど文学作品が〈一目惚れ〉を称えて、風教上よろしくない、というのである。

ところで、"first-sight love"といえば、恐らく、すぐ『お気に召すまま』（*As You Like It*）三幕五場中の有名な言葉——

Dead Shepherd, now I find thy saw of might,
'Who ever loved that loved not at first sight?'

が思い出されるであろう。よく知られているように、この「死んだ羊飼」とは劇作家・詩人クリストファ・マーロウを指すのだということである。が、シェイクスピヤやマーロウなどが何を称えたにもせよ、ここでパミラが、したがって、リチャードソンが攻撃している当面の文学作品は、〈小説〉と〈ロマンス〉であろう。『パミラ』は伝奇的な従来の物語を排して、日常生活の写実を骨子にした最初の近代的〈小説〉であり、内容的には、堅実な実践道徳を唱道した作品である。期せずして処女作『パミラ』を書いたとき、リチャードソンは自作を〈ロマンス〉とはもちろん、十七・八世紀的語義の〈小説〉とも、かなり厳重に区別していたのである。

『パミラ』中の〈第一印象〉という句の使用は、右のような趣旨に則っているのであるが、この句がはじめて出てくるときには、"favourable"という形容詞がついて、その意味が明瞭にされている——

That is to say, how a young lady ought to guard against and overcome the first favourable impressions?[9]

半ページほど先にこの句が繰り返されるが、そこには〈好意的〉という形容はついていない——

……were the lady but to keep herself in countenance for receiving first impressions……

が、なお、二、三ページあとでもう一度この句が出るときには、はじめと同様に、"of favour"と限定されている——

……it behoves a prudent woman to guard against *first impressions* of favour……[10]

リチャードソンの代表的傑作である第二作『クラリサ』(*Clarissa*, 1747—8) 中の用例は、まず、比較的、物語のはじめに出る。田舎紳士の娘で淑徳のほまれ高い美少女クラリサが、兄や姉の悪意と父の専断によって、無骨な求婚者ソウムズを押しつけられる。放蕩者の才子ラヴレイスがその家族間の確執につけこんで、クラリサを手に入れようとする。クラリサはラヴレイスの人格を認めていない。が、男としての彼に我知らず心を惹かれるらしい。一方、ソウムズにたいしては、判然と激しい嫌悪を覚えている。その気持を洞察できない彼女の家族親類

一同がいらいらし出す。叔母が彼女に説きつける。次の文章はそのような微妙な情況での叔母とクラリサの対話である——

But there are few first impressions *fit* to be encouraged.

I am afraid so too, madam. I have a very indifferent opinion of light and first impressions.(11)

『パミラ』の場合、とくに〈好意的〉と断わってあったように、ここには、"first" にたいして "light" という説明的な形容がつけ加えられている。とにかく、若い男女間の真の理解は軽々に成立するものでないという主張であろう。右の引用文のすぐ前に、叔母が「愛せないと思っていた男と結婚して幸せに暮らした女が沢山ある。初恋の相手と結婚できる女は少ないのだ」といっている言葉の趣旨は、それがクラリサ、すなわち若い〈女〉の真情とどう抵触したにもせよ、常識的には傾聴すべき意見であり、現実的な物語作者リチャードソンの教訓であったであろう。

次に、物語が進んで、クラリサはラヴレイスの奸計によって自家からおびき出され、心ならずも彼とともにロンドンへ出る。そして、曖昧宿へ閉じこめられて、彼の暴力のいけにえになる。二人の仲が完全に破綻してしまう。そのあとで、ラヴレイスが友人に書きやった言葉のなかに、もう一度、〈第一印象〉という句が出る——

It is hard to remove early-taken prejudices, whether of liking or distaste: people will *hunt*, as I may say, for reasons to confirm first impressions, in compliment to their own sagacity.(12)

『クラリサ』は壮大な、情熱的な悲劇である。喜劇作者ジェイン・オースティンがそこに直接創作の根拠をおいたはずはない。が、右の引用文中には〈偏見〉(prejudice) という語が見え、必ずしも好意的ではないと断られたその〈偏見〉が、〈第一印象〉と同義に扱われている。『クラリサ』と『自負と偏見』との関係は見かけ以上に密接なようである。

リチャードソンの第三作『サー・チャールズ・グランディソン』(*Sir Charles Grandison*, 1753—4) は当然な技法の円熟にもかかわらず、普通、失敗作と考えられており、今日ほとんど読まれない。しかし、『クラリサ』と違って、現実生活の建設面を強調した〈喜劇〉的なこの

作品は、一見してわかるように、オースティン好みである。事実、彼女はリチャードソンの作品中でもとくにこの物語を愛読し、その内容を細部までよく記憶していたという。[13] 恐らく、物語の終り近くに出る〈第一印象〉という句に気づいていたに相違ない。

クラリサと同じく才色兼備の女主人公ハリエットは、クラリサと違って、自由に結婚相手を選ぶことができる。彼女の近親は誰もその選択に干渉しようとしない。したがって、理想的な紳士サー・チャールズと彼女の関係が縺れるわけは、ただ、双方を崇拝する異性の群が介入するためである。が、とにかく、種々の面倒が結局無事に納まり、二人が結婚したあとで、ハリエットの祖母シャーリー夫人が自分の少女時代の思い出を語るところがある。

自分の若いころにはロマンスが流行した、と夫人がいう。自分はその種の不自然な、とほうもない作りごとにかぶれていた。十六歳のときにある立派な婦人と知り合いになり、そのおかげでやっと常識を取り戻すことができたが……それはいつごろまでのことだったのですか、と話相手がきく。すると、夫人が答える——

> Not till I was quite twenty. That good lady cured me of so false a taste: but, till she did, I had very high ideas of first impressions; of eternal constancy; of love raised to a pitch of idolatry.[14]

ここでも、先に述べた『パミラ』の場合と同じく、〈第一印象〉は〈ロマンス〉、すなわち、現実感覚に基づかぬ作りごとの特徴的なモティーフの一つと解され、物語が一応めでたく終結したときに、いわば自祝的な人生解説の言説中に使われている。いいかえれば、リチャードソンが自ら創始したと信じる新しい文学様式（真の〈小説〉）によって、打破しえたはずの人間関係の迷妄なのである。

物語『第一印象』がどのようなものであり、その改訂がどの程度であったにもせよ、[15] 出来上った作品『自負と偏見』のなかにも、リチャードソンふうの〈第一印象〉の過誤という観念が盛られていることは明らかである。

この有名な物語の筋を詳しく紹介するまでもあるまいが、順序のために、だいたいを述べれば、次のようである。

田舎紳士ベネット氏は五人娘を持っているが、やさしい長女ジェインと利発な次女エリザベスのほかは、みな無分別な厄介娘で、ことに、末子のリディヤは撥ねっ返りである。ベネット家の財産（土地）が法律上の取りきめによって、そっくり親類筋の青年コリンズに譲られることになっているので、ベネット夫人は娘たちが有利な縁組をするようにとやきもきしている。財産家の青年ビングリーが近所へ引き越して来て、ジェインに気のあるけはいを示し、そして、人の口端に上った彼らの結婚話は立ち消えになる。一方、ビングリーの友人で名家の御曹子のダーシーとエリザベスは、それぞれの〈自負〉と〈偏見〉が対立して、いがみ合う。彼女はコリンズの求婚を斥けたのち、美貌の士官ウィカムに気を引かれるが、思いがけずダーシーから求婚され、手厳しく撥ねつける。リディヤがウィカムと駈け落ちをする。

そのあと、ようやく相手を見直しかけていたエリザベスとダーシーの気持が接近して、ジェインとビングリーが結婚するとともに、めでたく彼らも結婚する。

右に一言したように、この物語の主題は、〈第一印象〉に基づく若い女性の誤まった判断〈偏見〉が、人間的経験を通して矯正されることだといえるであろう。で、その〈偏見〉とは、もちろん、表向きダーシーにたいするエリザベスの嫌悪を指すのであるが、また、他面、ウィカムにたいする彼女の早まった好意がそれに照応している。先に述べたように、『クラリサ』中に〈第一印象〉という句が必ずしも好意的ではない〈偏見〉と同義に使われているが、基本的には、この句は〈一目惚れ〉を意味することが多い、あるいは、多かった、のであるから、この場合、エリザベスとウィカムの関係が作品構成上に持つ意義を、見逃すべきではあるまい。いいかえれば、対照的な二人の男にたいして揺れ動くエリザベスの気持の振幅に、ジェイン・オースティンの特徴を認めるべきであろう。いや、むしろ、はっきりそれを彼女の〈独創〉と呼んでもよいかもしれない。

それにしても、『自負と偏見』のなかに、"first impressions" という句そのものは見当たらないようである。が、第三巻第四章に次のような言葉がある――

もし感謝と尊敬とが、愛情のよき基礎だとすれば、エリザベスのこの気持の変化は、当然ありうることだし、またまちがってもいない。だが、もしそうでないとすれ

ば、つまり、いいかえれば、よくいわれる一目惚れとか、またろくに言葉も交わさぬうちに好き合った、というようなのに比べて、そうした感謝とか尊敬とかから生れた愛などは、不自然、不合理というのであれば、もはや彼女への弁護の余地はない。だが、ただ強いていえば、前者、すなわち一目惚れのほうは、前にすでにウィカムの場合で、多少試験ずみであり、しかも、それが失敗であったために、こんどはやむなくもう一つのほうを、あまり面白くはないが、とにかくやってみたのも、やむをえなかろうという、まずそれくらいがせいぜいだった。[16]

エリザベスが一度ダーシーの求婚を断ったあと、大分してから、叔父夫婦に連れられて遊山旅行に出て、たまたまダーシーの邸を訪れ、彼に会い、好意を覚えはじめたとき、リディヤの駈け落ちを姉の手紙で知ったところである。

このアイロニカルな一種の注釈は、めったに直接自分の声でものをいわない客観的な物語の語手ジェイン・オースティンの言葉使いとしては、かなりはっきり際立っている。作品構成の意識的な告白、ないし、主張だといってよいであろう。ところで、ここに、「よくいわれる一目惚れ云云」と訳されている原語は "what is so often described as arising on a first interview with its object……" であるが、それは、当時流行していた煽情的な物語、たとえば、先に一言した『ユドルフォ』の女主人公と主人公の関係[17]などを揶揄したものかもしれない。

が、また、そのような観念の系譜は、当然、リチャードソンの "first-sight love" と、したがって、"first impressions" へたどることができる。この場合、語手のアイロニカルな語気はリチャードソンふうの健全さへ目を向け直すことから発しているのである。

とにかく、右の引用文のなかで、人間関係をあらわす最も目立った語は恐らく〈感謝〉(gratitude) であろう。エリザベスがダーシーに好感を抱いたのは浮わついた出来心でなく、彼の人柄を理解して、その厚意を率直に認めることができるようになったからだ、というのであるが、〈感謝〉という観念は、早く、物語のはじめ（第一巻第六章）に、粗野な意味で提出され、物語（結婚談）を展開させるモティーフの一つになっている。コリンズと打算的な結婚をするエリザベスの友人が、ジェインの控え

目な態度について、こんなことをいう――

「つまり、かんじんの相手にまでね、そんなふうにうまく感情をかくしてしまったとしてごらんなさい、かえって相手の心をつかみそこなうことになるんじゃない？そうなっちまってから、世間もやはり知らないんだから、なんて、自分でなぐさめてみたところで、ずいぶんつまんない話じゃないの。すべて愛情ってものにはね、やっぱり感謝だとか、虚栄なんてものが大事なのよ……」

この婦人は〈感謝〉と〈虚栄〉を同列において、それを功利的に眺めている。彼女が突然コリンズと結婚するのは、その持説の性急な実行であり、彼らの仲に真の〈感謝〉が生じるわけはない。それにたいして、ダーシーの邸で彼と再会したエリザベスは、〈偏見〉に基づく自分のはしたない言動を許し、なお愛情を持ち続けてくれているらしいダーシーに、〈感謝〉せずにおれない。右に引用した〈注釈〉よりも二章前、すなわち、第三巻第二章に、こんなことが書いてある――

それは――ただ彼女を愛してくれたというだけでなく、それを拒んだときの彼女のヒステリじみた非礼や、あるいはそのときいっしょに口にした、ありもしない非難まで、ことごとく忘れて、いまもなお愛してくれているらしい、その気持に対する感謝だった……あれだけ誇りの高かった彼が、こんなにも変ったということは、単におどろきばかりでなく、たしかに一つの感謝だった――というのは、なんとしてもそれは愛、それも熱烈な愛によるとしか思えなかった。そしてまた、そうだとすれば、彼女の受けた感銘は、かならずしもはっきりいうことはできなかったが、とにかく不愉快なものでは決してない、したがって、もっと強められても、少しも悪くない種類のものだった。（傍点筆者）

「かならずしもはっきりいうことはできない」が、「不愉快ではな」く、「もっと強められても悪くない」〈感銘〉(impression) をエリザベスがダーシーのような〈誇り〉(pride) の高い男から受けた、という文脈と、それに伴なう〈感謝〉という語の繰り返しは、この物語の成立の基礎に、いいかえれば小説家ジェイン・オースティンがここで構想した人間関係の図式のなかに、〈感謝〉がどれほど大きな意味を持っているかを、暗示するように思われる。

〈感謝〉はリチャードソンの作品中でも重要な観念である。まず、『パミラ』のなかで、パミラと主人B氏との結婚式の模様を父母に報せる彼女は、次のようなことを書いている――

そして、指輪の儀式が行なわれましたが、わたしは心底から感謝に満ちた気持で、御主人の手から、その大切な贈物を受け取りました。あとで聞きますと、あのかたが「この指輪をもってなんじをめとり云云」とおっしゃったとき、わたしはお辞儀をして、「有難うございます」といったそうです。[18]

「有難うございます」とは、もちろん、パミラがB氏にいった言葉である。が、彼らの結婚式がその結合を承認し権威づける聖なる儀式である限り、パミラの〈感謝〉は、じつは、根本的に神に捧げられているのである。いったい、この物語の副題「淑徳の酬い」は出版当時すでに物議をかもしたような功利的な含意があるわけではなく、B氏を通じて神の摂理が顕現した結果を意味する。少なくとも、物語を構想する作者は基本的にそう考えていたらしい。[19]

〈感謝〉という観念ばかりでなく、語そのものも、度度使われているが、たいていの場合、B氏にたいすると同時に、あるいは、それに重なり合って、神にたいするパミラの気持が、この語によって示されている。たとえば、第一部の終り近くに、次のような言葉がある――

おお、神様、謙遜と感謝をお与え下さい。[20]

女主人公と主人公の交渉が破綻してしまう『クラリサ』には、いうまでもなく、後者にたいする前者の〈感謝〉が生じるはずはない。が、第三作『グランディソン』中には再びこの観念が目につく。ここでも、世界の秩序を保っているものは、基本的に、神慮である。しかし、『パミラ』のひたむきな、したがって、固苦しい宗教的偏執は、おおらかに和らぎ、作者の目はなごやかに過誤に満ちた〈人間〉の営みへ向けられている。たとえば、"first impressions" ないし、「偶像崇拝の域に達する愛」をシャーリー老夫人が語る、先に引用した条りから、半ページほどあとに、次のようなことが書いてある。文中、"she" とは若き日の夫人の忠告者を指すのである――

Esteem, heightened by gratitude, and enforced by

duty, continued she, will soon ripen into love: the only sort of love that suits this imperfect state; a *tender*, a *faithful* affection.

ここで、もう一度、先に引用した『自負と偏見』第三巻第四章中の〈注釈〉を、原語で引いてみたい――

If gratitude and esteem are good foundations of affection, Elizabeth's change of sentiment will be neither improbable nor faulty……

物語『自負と偏見』のこの個所をジェイン・オースティンが筆にした時期が、『第一印象』の執筆から改訂へと続く経過のどの段階であったにもせよ、そのとき、彼女は右の『グランディソン』中の言葉を思い浮かべていなかったであろうか。

はじめに一言したように、〈自負〉と〈偏見〉は十八世紀末の物語に通有的な観念であるが、その源は、イギリス小説のたいていの現象のように、リチャードソンへ遡ることができる。そして、その意味で、物語『自負と偏見』が彼の小説、ことに、『グランディソン』から系統を引いていることは、すでに小著に述べた通りである。[21] いま、〈第一印象〉という句を検討した結果も、ひとしく、『自負と偏見』がリチャードソン文学の系譜に入ることを示している。

ジェイン・オースティンの〈芸術〉はリチャードソンの人間把握の方式を踏襲しているのである。そして、そのわけは、もちろん、彼女の生きていた実生活がリチャードソンのものと基本的に同一であったからであろう。ただ、彼女はこの偉大な先達の描いた人生像を、いっそう「狭い範囲」[22]に限定して、鮮明な浮彫にし、物語の世界にそれ自体のみごとな秩序を――現実的な芸術的構成を与えたのである。

リチャードソン―オースティンによって提出された〈人間〉とその相互関係の型は、その後、歴史の展開に則して発展した。そして、その線に、事実上、偉大なイギリス小説の伝統の一つが成立することになった。[23] ジェイン・オースティンの物語が今日なお生きている理由は、ある意味で、彼女がリチャードソン文学の最も本質的な手法を識別して、それを自分の実生活の素材に適用したところにあった。それがほかならぬ彼女の〈独創〉であった、といってよいであろう。

とすれば、そのような的確な識別と適用の能力こそ

が、この類いまれな女流小説家の〈芸術〉の秘訣であったのである。

(1) その年代を書きつけた作者の姉カサンドラの備忘が写真版で *The Works of Jane Austen*, ed. by R. W. Chapman, VI に出ている。

(2) *Pride and Prejudice*, Apendixes, "*PRIDE AND PREJUDICE* and *CECILIA*."

(3) 『ジェイン・オースティン論考』(昭和三十七年七月) III、1

(4) *The Romance of the Forest*, Chap. XVI. *The Mysteries of Udolpho*, Chap XX. *Belinda*, Chaps. XVI. XXVI. なお、前掲書『ジェイン・オースティン論考』I、2、3、5を参照。

(5) Q. D. Leavis, "A Critical Theory of Jane Austen's Writings" (*Scrutiny*, X. i.)

(6) 周知のように、ヒュームの『人生論』(*Human Nature*) の冒頭に "impression" 及び "idea" が併立的に論じられている。その意義づけ、したがって、また、ヒューム哲学の根拠になったロックの思考 (Cf. *Human Understanding*, II, i. 23; xix. 1) と、十八世紀イギリスの生活的な場面におけるこの語の意味との関係とははなはだ興味深いが、いま、それを論じる十分な用意がないから、その論考は他日を期することにしたい。なお、Kenneth MacLean, *John Locke and English Literature of the Eighteenth Century* を参照。

(7) この事実は青木雄造氏の指摘によって示教されたことを記しておきたい。

(8) Henry Austen, "Biographical Notice of the Author," prefixed to "*Northanger Abbey* and *Persuasion*" (1818). J. E. Austen-Leigh, *Memoir of Jane Austen*, Chap. V.

(9) *Pamela II*. Everyman's Library ed., p. 464.

(10) *Idid.*, p. 467.

(11) *Clarissa*. Everyman's Library ed., I. p. 232.

(12) *Idid.*, IV. p. 34.

(13) 注(8)にあげた彼女の近親の記録にそのようなことが述べてある。

(14) *Sir Charles Grandison*. The British Novelists ed., VII. p. 218.

(15) かなりの大改訂であったらしい。その問題について興味深い考証をチャップマンが行なっている。R. W. Chapman, *Jane Austen, Facts and Problems*, VI. pp. 79—81.

(16) 中野好夫氏訳(世界文学大系、筑摩書房刊)による。この作品は普通通章になっていることが多く、中野氏訳でもこの個所は第四十六章である。なお、以下、『自負と偏見』からの引用の訳文はこの訳による。

(17) *The Mysteries of Udopho*, Chap. IV.

(18) *Pamela I*. Everyman's Library ed., p. 316.

(19) Cf. *Ididd.*, pp. 85, 247, 251 etc.
(20) *Ididd.*, p. 435.
(21) 『ジェイン・オースティン論考』Ⅲ、1
(22) その範囲を逸脱する〈人間的〉関心が、歴史的に生じかかっていたことも事実である。そして、その発生と展開の追求は十九世紀の小説家に課せられた大きな課題になったのである。ただ、それがジョージ・エリオットに至るまで十分〈芸術的〉に実践されなかったことも、また、歴史的事実なのである。
(23) 「イギリス小説の偉大な伝統」はジェイン・オースティン、ジョージ・エリオット、ヘンリー・ジェイムズ、コンラッド、D・H・ロレンスにある、とF・R・リーヴィスがいっている。F. R. Leavis, *The Great Tradition*, I.

(一橋大学教授)